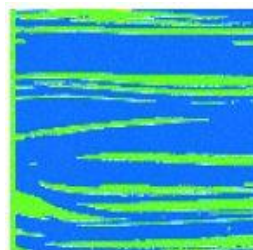


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース



2012年 春号 No.66 (2012年7月31日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 園山繁樹
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

理事長就任のご挨拶……………理事長・園山 繁樹
新事務局長就任にあたって……………渡部 匡隆
「カツオの塩たたき」でおもてなし……………第30回年次大会準備委員長 山崎 裕司
機関誌編集委員会から:英文抄録作成支援ボランティアの紹介について……………機関誌編集委員会
学会賞(論文賞・実践賞)決定のお知らせ……………研究教育推進委員会
シアトル ABAI 体験談……………小幡 知史
Local Beer SIG in SEATTLE 体験レポート:麦酒でつなぐ行動分析家の絆……………大月 友
2011年度第6回認定心理士研修会の報告……………研究教育推進委員会
退任のご挨拶と2009~2011年度のまとめ……………前理事長・藤 健一
事務局長退任にあたって……………大河内 浩人
2009-2011年度委員会活動報告……………各委員会
連載再開 jABA シアター:アリス・イン・ワンダーランド:「オズの魔法使い」再見……………伊藤 正人
編集後記……………ニュースレター編集部

理事長就任のご挨拶

理事長 園山 繁樹

この度、思いがけず理事長に指名されました。浅学
菲才の身ながらこれからの3年間重責を担うことにな
りますが、会員の皆様に一言ご挨拶申し上げ、一層
のご協力をお願いしますとともに、今後の活動方針構
想、役員・委員会等の体制を紹介させていただきます。

本学会は、「行動分析研究会」として1979年にスタ
ートし、1983年には学会として第1回年次大会が開
催されました。来年2013年に学会として30周年を迎
えます。その記念事業を行うために、特別委員会とし
て今年2月に、本学会初代理事長の山口薫先生を名誉

委員長、清水直治先生を委員長とした創立三十年記念事業実行委員会が発足しました。来年度にかけて様々な記念行事が企画・実施されます。また現在の会員数は900名を超え、今期中には千人を超えることが予想されます。このような意味でも、今期は本学会にとっての一つの画期になることと思います。これは前理事長の藤健一先生をはじめ、歴代の理事長、理事の皆様はもちろん、会員一人ひとりの不断の努力研鑽の賜物と考えています。今期はこれまでに築かれた基盤の上にさらに本学会の発展を図るべく重要な位置にあるといえます。

さて、本学会には他の学会と異なるミッションがあるのではないのでしょうか。それは「行動の理解に基づく社会への貢献」ではないかと、個人的に思っています。地球規模を考えても、温暖化、地域紛争、宗教間の軋轢、貧困、虐待、自死、共生社会の構築、等々、様々な解決すべき課題が山積していますが、これらにはすべて行動が関係しています。このように考えると、行動分析学が研究すべき課題は非常に多様なものとなります。別の言い方をすれば、この世の中には行動分析学のチャレンジを待っている重要課題がたくさんある、といえます。人間・動物の行動の理解を深め、その知見に基づいて社会的課題の解決に貢献する不断の研究・実践活動に、会員皆様とともに一層励みたいと思います。

以下、私の構想する今期の活動方針、並びに、現時点での役員・委員会等の体制をご紹介します。

今期（2012～2014年度）の活動方針構想

目標1 会員が千人を超える学会として、次のステージへの基盤をより強固にする。

①委員会の拡充

- ・国際委員会の新設：ABAI はもとより、特に東アジア地域とのネットワーク構築による国際的な行動分析学の発展に貢献する。

- ・社会貢献委員会の新設：東日本大震災後の日本社会の中で、行動分析学がどのように貢献できるかが期待されている。

②「行動分析学研究」の質的・量的拡充

- ・編集事務作業の外部委託による安定的発行と質・量の拡充。

③「年次大会」の充実と開催校への支援

- ・年次大会支援委員会による開催校支援の継続

- ・会期3日間の検討

- ④学会としての倫理に関する活動の確立と実施

- ・倫理に関する諸規定に基づく活動の実施

- ⑤若手研究者・実践者育成への貢献

- ・年次大会での発表に対する表彰等の検討

- ・ABAI&SQAB、ABAI 国際会議の助成人数の拡大または増額等を検討

目標2 日本行動分析学会創立三十年記念事業の実施。

①2012年2月に実行委員会が発足し、具体的事業の企画・実施の中核を担う。

②2012年が創立30年目、2013年が創立30周年（学会創立は1983年）。

③記念事業の全体予算は600万円（2011～2013年度の学会会計より各200万円）

役員・委員会等の体制（敬称略）

理事長 園山 繁樹

機関誌編集委員会

委員長（常任理事） 森山 哲美

委員長補佐（常任理事） 島宗 理

委員（理事） 吉野 俊彦

研究教育推進委員会

委員長（常任理事） 坂上 貴之

委員（常任理事） 藤 健一

委員（理事） 伊藤 正人

出版企画委員会

委員長（常任理事） 山本 淳一

委員（理事） 武藤 崇

委員（理事） 鎌倉 やよい

広報委員会

委員長（常任理事） 大河内 浩人

委員（理事） 米山 直樹

委員（理事） 佐伯 大輔

委員 是村 由佳

倫理委員会

委員長（常任理事） 眞邊 一近

委員（理事） 松見 淳子

委員（理事） 中野 良顯

年次大会支援委員会

委員長（常任理事） 中島 定彦

委員（常任理事） 奥田 健次

委員（理事） 井澤 信三

国際委員会

委員長 (常任理事) 杉山 尚子
委員 (理事) 青山 謙二郎

社会貢献委員会

委員長 (常任理事) 井上 雅彦
委員 (理事) 平澤 紀子
委員 (理事) 浅野 俊夫

監事

清水 直治
山岸 直基

学会事務局

事務局長 (常任理事) 渡部 匡隆
事務局長補佐 (理事) 野呂 文行
事務局員 松下 浩之
伊藤 玲

創立三十年記念事業実行委員会 (特別委員会)

名誉委員長 山口 薫
委員長 清水 直治
副委員長 杉山 尚子
副委員長 武藤 崇
事務局長 山岸 直基
委員

河嶋 孝 小林 重雄 小野 浩一
中野 良顯 藤 健一 園山 繁樹
浅野 俊夫 青山 謙二郎 井澤 信三
奥田 健次 真邊 一近

学術集会 (熊野大会) 委員会

○奥田 健次 杉山 尚子 笹田 夕美子

シンポジウム・特集号委員会

○井垣 竹晴 井澤 信三 石井 拓
長谷川 芳典 藤 健一 真邊 一近

出版委員会

○武藤 崇 青山 謙二郎 森山 哲美

記念グッズ委員会

○杉山 尚子 大久保 賢一 奥田 健次

(○印：下位委員会委員長)

新事務局長就任にあたって

渡部 匡隆

この度、園山新理事長から事務局長を仰せつかりました。事務局体制の交代にあたり、旧事務局の先生方から引き継ぎを頂きましたが、旧事務局において学会運営業務の改善に数多くの取り組んで頂いたことにあらためて感謝しております。

旧事務局から引き継ぎました課題の1つに、学会費の口座自動引落しがあります。旧事務局のご努力により学会費の納入率が向上していますが、行動分析学に対する社会の強い期待に応えるとともに、いよいよ千人を超える会員規模のもつ学会として活動を円滑に進めていくため

にも今期の学会運営に関する重点課題の一つとして取り組んでいきたいと考えております。会員の皆様には、口座自動引落しへの移行手続きのため今後いくつかお願いしなければならない作業が生じると思いますが、何とぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

旧事務局体制の中で改善されてきた学会運営業務を、今後、さらに継続・発展できるか不安がありますが、園山新理事長、藤田理事長をはじめ新旧の各種委員会委員並びに学会員の皆様のご指導、ご協力を頂き、少しでも寄与できる

よう努力してまいりたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

「カツオの塩たたき」でおもてなし

第30回年次大会準備委員長 山崎 裕司 (高知リハビリテーション学院)

カツオは、夏に黒潮と親潮とがぶつかる三陸沖辺りまで北上します。ご存知でしょうが北上中に漁獲されるカツオは「初鰹」と呼ばれます。三陸沖で栄養たっぷりの餌を食べたカツオは、秋になると南下します。このカツオは「もどり鰹」、または脂がのっているので「とろ鰹」と呼ばれます。私は、県外のお客さんを接待するときは、必ず「塩たたき」と決めています。「とろ鰹の塩たたき」を食べたお客さんは、異口同音に「こんなの食べたことがない！」と驚かれます。そして、再会した時には「カツオが他で食べられなくなった。」と嘆かれます(味が違うので満足できないという意味)。本大会の時期(9月1, 2日)は、もどり鰹のシーズンです。高知城ホール内には、昼食をとるスペースはありませんが、おいしい鰹を食べさせる「ひろめ市場」は、徒歩3分の距離です。2つの会場を行き来しながら第30回年次大会をお楽しみください。

本大会には100題におよぶ演題登録をいただきました。不便な場所にもかかわらず多数の皆様に参加していただき、準備委員一同大変喜んでいきます。一般演題発表は、大会1, 2日目の午前中にポスター形式で行われます。

今年の日本疲労学会では、理化学研究所分子イメージング科学研究センターの水野先生から、興味深い報告がありました。それは、「あと10分で終わります」といった授業中の残り時間を告げる情報は、意欲の中枢と呼ばれる腹側線条体の活動を高めるという内容です。見通しを持たせる先行刺激の有用性を神経生理学が支持し

たものです。行動分析学を生業にするものとして心強い限りです。大会1日目の午後に予定されている北澤 茂先生(大阪大学)の特別講演「行動分析学の神経生理学的背景」では、神経生理学からみた行動分析学の妥当性が示されます。間違いなく私たちを元気づけてくれる内容です。

大会企画のシンポジウム「行動分析学によるリハビリテーションの発展」は、大会1日目の午前中に予定されています。本大会での一般演題発表の約四分の一は、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士による発表です。例年になくリハビリテーション関連職種の方々の参加が多くなっています。行動分析学の輪をひろめるよい機会になるでしょう。

大会1日目の夕方には、会場内でちょっと早めの懇親会を企画しています。カツオのたたきなど、おいしい高知の地のものを準備させていただきます。お楽しみください。

自主企画シンポジウムは、大会2日目に予定されています。午前中は、山本淳一先生(慶応義塾)の企画による「ソーシャル・スキルズ・トレーニングの最先端」です。午後には、仁藤二郎先生(ウェルネス高井クリニック)の企画による「臨床場面における一事例の実験デザイナーそれは認知か行動か(3)ー」です。

杉山尚子先生による教育セミナー「セラピストのための行動分析学入門」は、大会2日目の午後に予定されています。行動分析学に興味を持ち始めた多くの先生方に参加いただきたいと

思います。

大会2日目の最後には、山本淳一先生による公開講座「できる！を伸ばす特別支援教育」が行われます。数多くの学校関係者、ご家族の皆

様の参加をお持ちしています。

みなさまの出席をこころからお待ち申し上げております。

<機関誌編集委員会からのお知らせ>

英文抄録作成支援ボランティアの紹介について

行動分析学研究に論文を投稿したいけど英文抄録の作成に自信がない。受理されるかどうかもわからないうちから英文校閲サービスに高い料金を支払うのもためらわれる…

そんな声に海外で行動分析学を勉強している日本人の方から支援の手が差し伸べられます。

今年度も、昨年度に引き続き、英文抄録作成支援ボランティアを募集しました。先日、シアトルで行われた **ABAI Expo** にて在米日本人行動分析家をお願いしたところ、自分も勉強になるので、ぜひ協力させて下さいという暖かいお申し出を数名の方からいただきました。

英文抄録作成支援を依頼したい会員の方は行動分析学会の「投稿のてびき」と「執筆要項」に即した形式で原稿を用意し、編集事務局 (jjba-edit@bunken.co.jp) までメールでお送り下さい。投稿論文と区別がつくように、

英文抄録作成支援の依頼であることを明記して下さい。

なお、申請資格は以下のとおりです。

- (1) 行動分析学会の学生会員または正会員で、大学などの研究機関に所属していないこと（大学の教員や研究者の正会員には非適用とさせていただきます）。
- (2) 英文抄録を作成後、当該論文を行動分析学研究に投稿すること。
- (3) この英文抄録作成支援は、ご自身が勉強されながら、また、行動分析学を学ぶ祖国の仲間との共同作業を経験したいという心意気で協力して下さる無償ボランティアによるものであるということを十分に理解し、最後まで丁寧に気持ち良くやりとりができる方。

皆さまからのご投稿をお待ちしております。

機関誌編集委員長 森山 哲美

学会賞（論文賞・実践賞）決定のお知らせ

研究教育推進委員会

学会賞（論文賞・実践賞）が決定しましたので、以下に報告します。

第5回（2009～2011年度）論文賞 丹野貴行・坂上貴之(2011)：行動分析学における微視-巨視論争の整理-強化の原理、分析レベル、行動主義への分類-。行動分析学研究, 25(2), 109-126.

本論文は、テーマの独自性、先行研究の分析の緻密さ、新しい視点の提供など、多くの点で高く評価がなされました。会員からの興味関心も高く、読者にとっても非常に意義ある論文であると判断されました。

第9回（2011年度）実践賞 徳島ABA研究会（代表：田中清章 [徳島県立阿南支援学校]）

徳島ABA研究会は、2004年に発足し、応用行動分析学の考え方を特別支援教育に活かすことを目的とした研究会です。主な活動は、月例研究会（月1回程度）、応用行動分析サマースクール（初級コース、中級コース、双方とも年1回）、特別講座（年1回）等の活動を行っています。その中でも特筆すべき点として、「事例研究データベース（約250事例以上）」が挙げられま

す。また、データベースなどはWebに公開されている点や、研修効果の検討について研究論文等の成果につながっている点も評価されました。なお、研究会Webは、<http://tokushimaaba-renraku.blogspot.jp/> ですので、ご参照ください。

両受賞者へ授賞式および記念講演は、今年度の高知での年次大会中に開催されます。是非、みなさまのご参加をお待ちしております。

論文賞は3年に一度、会員の投票と理事による投票によって決定されます。今回、会員から多くの投票があったことに感謝いたします。実践賞は毎年会員からの推薦から常任理事会での審議を経て決定されます。このように、学会賞は会員の方々の支えにより成立しています。学会賞（論文賞・実践賞）の規定については、学会Webに掲載されています。今後とも支援のほど、よろしく申し上げます。

シアトル ABAI 体験談

小幡 知史（常磐大学大学院人間科学研究科研究生）

この度、今年の5月25日から29日にかけてシアトルで開催された第38回国際行動分析学会(ABAI)に、日本行動分析学会から「日本在住学生会員のABA/SQAB参加に対する助成」を受け、参加することができました。この場を借りて、お礼申し上げます。

都合によりシアトルに滞在できたのは3日間だけでしたが、刺激的で充実した時を過ごすことができました。ABAIの参加・発表は今回で2回目でしたが、相変わずの豊富なプログラムに圧倒され、直前までどれに参加しようかと迷

っておりました。今回は初めての単独海外渡航であったため、「果たして無事にシアトルの大地を踏めるのか？」という漠然とした不安がありました。幸い、行きは常磐大学の菅佐原洋先生や流通経済大学の山岸直基先生と同じフライトだったので、安心して着くことができました。

私は、指導教授である森山哲美先生と連名で「An appropriate index for resurgence」というタイトルで5月26日にポスター発表しました。多くの方が聞きに来て下さったことは、私にとってとても印象的でした。中でも Andy A. Lattal 先生

が一昨年の San Antonio での発表に引き続いて来て下さったことは、とても強化的でした。前回の発表内容を覚えて下さっていて、鋭いご意見もいただきました。また、West Virginia 大学の方々とも議論ができて大変有意義な時間を過ごすことができました。ABAI の最大の魅力は、発表の機会を通して、このように多くの研究者と生で熱く語り合えることだと改めて実感しました。

短い滞在期間だったため、多くのセッションに参加できませんでしたが、Iver H. Iversen 先生の招待講演「The need for molecular analyses」や Sara E. Bloom 先生らによるシンポジウム「Evaluations of interventions for problem behavior using contingent and noncontingent reinforcement」など、基礎から応用まで、とても興味深いセッションに参加することができました。特に Bloom 先生のセッションにおけるシンポジストの一人は、前回の ABAI で知り合った博士課程の学生（当時）でした。感銘を受けつつも、負けてはいられないと思いました。

ABAI での楽しみのひとつに、book store での様々な本との出会いがあります。毎度、目移りして買いすぎてしまい、今回も懐がさびしくなりました。今回購入した本の中で、Eileen Gambrill 先生の「Critical thinking in clinical

practice」のサイン会が催されていたため、出席しました。日本から来たと話すと、「わざわざ日本からようこそ！」と優しい言葉で声をかけてくださいました。最後まで「Tokiwa（常磐）」を「Tokyo」と仰っていたことが気がかりでしたが…。

今回も以上のような素晴らしい体験ができました。これもひとえに日本行動分析学会の助成金のおかげとっております。改めて、感謝申し上げます。



ポスター発表会場にて

Local Beer SIG in SEATTLE 体験レポート

～麦酒でつなぐ行動分析家の絆～

大月 友（早稲田大学人間科学学術院）

2012年5月28日(月), 米国シアトルにて LBS 総会が開催されました。今回はその体験記を書かせていただきます。

LBS 総会、なんだかすごい響きです……。 “LBS 総会” というと、ご存じない学会員の方には、なんだか新手的 “学会” の大きな “会議”

のような印象を与えるかもしれません。しかし、実のところ、“LBS”というのはこの体験記のタイトルにあるように、“Local Beer SIG”の略でして、“総会”というのは“飲み会”，いや“懇親会”，うーん，“情報交換会”になります。私は、今年で2回目の参加となります。というわけで、まずは、このLocal Beer SIGの紹介から始めたいと思います。

Local Beer SIG (LBS) という用語は、歴史的にみると杉山 (2009) で初めて登場するようです。行動分析学を学んでいる在米日本人学生・社会人と日本の学生 (+若手? 教員) の交流の場として、ABAI (国際行動分析学会) 会期中に2009年から開催されています。Local Beer SIGというだけあり、ABAIが開催される都市の地ビール醸造所併設のパブで開かれます。なぜ地ビールかというと、このSIGの主催者の杉山尚子先生が、ビール (特に、上面発酵麦酒) の研究と実践をなさっている“専門家”でして (つまりは大のビール好き)、昔からABAIのときはご当地のブリュワリー (ビール醸造所) 訪問をされていたからだそうです。ビアパブは、広い空間で大きなテーブルもあり、なおかつリーズナブルな値段でおいしいビールと料理を楽しむため、この種の“情報交換会”には最適だったようです。つまり、“LBS 総会”というのは、行動分析学でつながる在米日本人と在日日本人が、ABAI開催地のご当地地ビールに舌鼓を打ちながら、情報交換を行う素敵な会なのです。なお、誕生の経緯等は杉山 (2009) をご参照ください。日本行動分析学会のHPから閲覧可能です。

というわけで、2012年のABAIはシアトルだったので、LBS 総会もシアトルの醸造所パブPike Brewing Companyで開催されたのでした。今年のご縁があって、幹事の方々の事前ミーティング (@別のビアパブ) から参加することができました。なんと今回は事前の申し込みだけで40人を超える盛況ぶり。というわけで、事前ミーティングでは、いかに40人を超える大人数

をビアパブに誘導するか、どのように会費を集めるか、“総会”をどのように進行するかなど、地ビールを片手に真剣に議論がなされました。さすがは行動分析家の集まりだけあって、先行刺激の出し方、参加者一人一人が正の強化を受けられるような環境設定の工夫など、行動的な熱い議論が繰り広げられました。どうやらこのLBS 総会の事前準備は、年々綿密になり、より行き届いた“総会”が開催されるようになっていくようです (詳細は山本, 2010 を参照)。実際、今回も申し込み方法や参加者への事前連絡、さらには食事のメニューまで、事前に幹事の先生方の中でメール会議が繰り広げられていたようです。このあたりも行動分析家の魂を感じるころですね。またこの日は、杉山尚子先生による地ビールに関する熱いレクチャーもあり、事前ミーティングから様々なビールを堪能してしまいました・・・。

そして総会当日。この日は21:00までポスター発表があったので、途中から参加という方々もいましたが、なんと、最終的な参加者は54名という過去最大の盛況ぶりとなりました。多くの日本在住の学生、研究者、そして在米日本人、さらには、海外ゲストとしてオハイオ州立大学のBill Heward先生とJill Dardig先生も参加されました。ちなみに、Heward先生は麦酒の自家醸造をなさるほどの“超専門家”でして、このLBSの名誉会長でいらっしゃいます。総会は、各テーブルで4種類の地ビールを片手にさまざまな情報交換が活発になされたようです。当初23:30で終了予定でしたが、盛り上がり過ぎて0時に近づき、パブの店員から帰ってくれと懇願されるほどでした・・・。国際学会なので、日中は英語で発表をしたり英語の発表を聞いたり英語づくし。そのため、日本語の遮断化がなされています。そういった確立操作が、日本語での相互作用をより強化的にさせたのではないのでしょうか。帰り道の夜風が肌に心地よく、また来年もLBS総会に来たいなあと思ったのでした。杉山尚子先生をはじめLBSの幹事をしてくださ

った先生方に、この場を借りて深くお礼申し上げます。会員の皆様も、ぜひ ABAI に参加し、LBS でいろいろな方との交流（そして地ビール！）を堪能してください。

追記）もちろん ABAI 自体も最高でした。個人的には、関係フレーム理論（Relational Frame Theory）関連のシンポジウムに、年々聴衆が増えていることに興奮しました！こっちのアカデミックな話はまたどこかで・・・。

《引用文献》

杉山 尚子 (2009). Local Beer SIG 誕生？— ABAI2009 を終えて— 日本行動分析学会ニュースレター, 54, 5-7.

山本華奈子 (2010). Local Beer SIG が結ぶご縁 日本行動分析学会ニュースレター, 60, 14-16.



今年も盛会

2011 年度第6回認定心理士研修会の報告

研究教育推進委員会

公共社団法人日本心理学会認定心理士 2011 年度第6回研修会が、日本行動分析学会との共同企画として、2012 年1月22日（日）13:00～16:40に、フォレスト仙台にて行われ、50名程度の参加者がありました。

仁平義明先生（白鷗大学・日本心理学会）のあいさつに始まり、それに続き、私の方から今日の内容と行動分析学会についての紹介を行いました。

基調講演「行動分析学とは何か（杉山尚子氏・日本行動分析学会理事）、講演①「動物行動訓練における行動分析学（中島定彦氏・関西学院大学）」、講演②「発達障害支援における行動分析学（佐竹真次氏・山形県立保健医療大学）」と盛りだくさんの内容であり、たいへんわかりやすく話していただきました。

最後に、15分程度の質疑応答の時間を設けま

した。研修会に参加されていた学会員である田島裕之氏(尚綱学院大学)からの質問を皮切りに、一般参加者からも鋭い質問が続き、時間をオーバーしても質問が終わらず、終了後もフロア前方にて講師陣とのディスカッションが続きま

した。以下に質問例をまとめてみます。行動の個人差（たとえば、兄はある行動するのに、弟はしないとか）についてどのように考えるか、その場合、個体に原因を求める方がよいのではないか、スキナーによる「結果が行動の原因」であるという発想はどのようにして生じたのか（どうやって思いついたのか）、認知療法・認知行動療法について行動分析家はどのように考えているのか、などなど。非常にエキサイティングでしたし、私自身がそれに対する講師陣の回答に興味津々と聞き入っていました。

会場の準備等にお世話はいただいた邑本俊亮先生（東北大学）、また、講師をお受けいただいた先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。最後に、ご報告が遅くなってしまったことをお詫び申し上げます。（井澤信三）



杉山尚子先生



中島定彦先生



佐竹真次先生

退任のご挨拶と2009～2011年度のまとめ

前理事長 藤 健一

梅天のもと、今年もセミの鳴き声が聞こえて参りました。会員の皆様にはお変わりなく、ご活躍のことと拝察致します。

さて、小生はこの3月末日をもちまして、理事長を任期満了により退任致しました。2009年度からの3年間で、会員の皆様のご理解とご協力とをもって理事会の任にあたりました。この3年間で振り返ってまとめてみました。

2009年度～2011年度 行動分析学会事業のまとめ

目標1 「行動分析学の研究の進展と教育の普及を担う学会として、その運営形態をより洗練

するとともに、学会の基盤をより強固にすること。」（2009年7月11日総会で承認）

（1）各委員会の役割の一層の明確化と、各委員会業務の立案・実施過程の可視化

理事会委員会体制を再編して、「機関誌編集」・「研究教育推進」・「出版企画」・「広報」・「倫理」・「年次大会企画」の6委員会体制+1事務局体制をもって事業を実行しました。

（2）各委員会の機能の日常的発揮のための事務業務整備

学会事務（年会費徴収・会員管理・機関誌発送など）の外部委託（リファレンス）を開始し

ました。

(3) 入会退会の名簿管理、学会費納入率の向上

学会事務委託業務に組み込むことにより、実会員率の向上、学会年度費納入率の向上を実現しました。

(4) 広報の強化

学会事務委託業務に組み込むことにより、学会HPの随時更新体制を確立し、またNL発行編集体制を工夫しました。ただし、担当委員会の業務のひとつである国際関連業務量が近年増加の一途をたどり、これにより担当委員会の負担増が生じました。

(5) 年次大会開催についての学会支援の方法の研究と実行

理事会委員会に新設した年次大会企画委員会により、計画的な大会開催校の依頼と大会実施が実現しました。

(6) 「行動分析学研究」の定期刊行のための迅速な投稿・査読システムの設計と実現

編集委員会体制を新たに編成し、また新査読システムに基づく編集方式に移行しました。編集事務の一部外部委託（リファレンス）を実施しました。また、抜本的な編集事務委託化については、調査研究の結果、2012年度以降において、国際文献印刷に委託することに決定致しました。

(7) 学会の研究所産の公開と利用の促進

機関誌「行動分析学研究」については予定通り刊行することが出来ました。出版企画については3件が実行されました。「行動分析学研究」および「行動分析学会大会発表論文集」の電子図書館などの契約継続、公開講座、教育セッションなどを毎年度実施しました。

目標 2 日本行動分析学会創立三十年記念事業の準備。(2009年7月11日総会で承認)

創立三十年記念事業については、この3年間において、まず記念事業検討委員会(2009~2010

委員長 浅野俊夫)を設置しました。この委員会において、記念事業の基本的方針を決めました。次いで移行した記念事業準備委員会(2010~2011 委員長 武藤崇)において、記念事業の素案を検討しました。そして、記念事業実行委員会(2011~ 委員長 清水直治)において記念事業の具体案の検討を開始したところです。

この3年間の任期を振り返って、いくつかの点について感想を述べたいと思います。ひとつめは、行動分析学と他の学問領域とは、今後ますますその関係が深まっていくだろうということです。関係を深める契機は、いくつもあると思います。共通の課題解決、学術研究の場の共有(学会参加など)、自身の研究関心の多様化、などなど。こういった他の研究領域との関係を広げたり深めたりする契機には、人が仲立ちとなることが多いのですから、特に若い会員には、いろいろの人とのつながりを大切にしてほしいと思います。学会として、他の学問領域、近接した領域とのやりとりを、いかに円滑にまた効果的に進めるかについては、やっとならぬかといったところではないかと思えます。ふたつめは、学会としての機能のうち、運営機能の充実については、この3年間においてかなり足腰を強化することが出来たのではないかと、思っています。旧理事会の各委員のご尽力により、実現の運びとなりました。ただ、これにも長い検討期間が必要でした。新理事会では、こういった新システムに移行したあとの評価と公表とを行なっていただきたいというのが、旧理事会の願いであります。みつつめは、年次大会についてです。近年、うれしいことに大会での発表件数や諸企画が増えました。そのために、2日間の大会日程では非常に窮屈となりつつあります。行動分析学会の大会では、どの参加者もその発表を聴いたり見たりすることができる、そのようなスケジュールを組んできました。それが、ほとんど不可能になりつつあります。大会開催校のご都合もあることですから、いろいろ

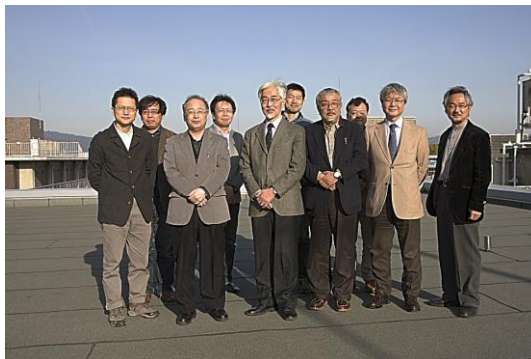
な工夫を一層凝らさねばならないと思います。年次大会に参加して楽しかった、という経験を提供できるような工夫が益々必要となってくると思います。これは、先に述べたひとつめの理由にも関係するからです。

さて、行動分析学会はいよいよ創立三十年を迎えようとしております。この学会や行動分析学の来し方行く末を点検する機会であり、会員の皆さんの参加とご協力をお願い致しく思います。

最後になりましたが、小生の理事長としての仕事を支えて下さった会員の皆様、旧理事会の理事の皆様方、事務局の大河内浩人 前事務局長、武藤崇 前事務局長補佐、学会のこまごまとした仕事をずっとこなして下さった土田宣明

会員（立命館大学）と吉岡昌子会員（愛知大学）には、心より感謝致します。ありがとうございました。

以上



最後の常任理事会の後（2012年3月29日立命館大学の屋上で撮影）

事務局長退任にあたって

大河内 浩人

2009年度から11年度までの3年間、その前の事務局長代理を含めると4年間、事務局の仕事に携わって参りました。理事としてはじめて役員に混ぜていただいたのが2006年4月というように行動分析学会に関する知識の浅い私が、またこの他にもほとんど事務局の仕事の経験のなかった私が、まがりなりにも渡部現事務局長にバトンを渡せたのには、主に3つの理由があるかと思えます。

まず、段階的に仕事の難易度が高まったこと。事務局長をお引き受けすることに先立つ1年半前、当時の事務局長であった武藤崇先生が在外研究で日本を離れることになり、1年間代理を務めました。そのときは、武藤先生がしっかりと事務局体制を作ってくださっていたので、私は、ほとんどお飾り（傀儡？）だったような気が

します。ただ、その間、ときどき事務局会議に出て、みなさまの仕事ぶりを見聞きし、教えていただく中で、少しずつ、学んでいったことがあったのだろと思います。

次に、常任理事ならびに理事のみなさまが寛容だったこと。理事会や常任理事会の議長は事務局長が務めるのが行動分析学会の慣例のようですが、なにぶん私は仕切りが悪く、特に務め始めた頃は、会議に4時間以上もかけてしまうことがたびたびでありました。そんな中でも議長を罷免することもなく、ご辛抱くださったこと、感謝しております。

最後に、事務局のみなさまのご支援があったこと。なにより、これが大きな力になりました。藤前理事長はじめ、武藤崇、土田宣明、吉岡昌子先生方には、本当にお世話になりました。特

に、藤先生には、こんな事務局長でごめんなさいと、お詫びと感謝の入り交じった気持ちです。ありがとうございました。

2009-2011 年度委員会活動報告

機関誌編集委員会

7 月末に皆さまのお手元に届く予定の行動分析学研究 27 巻 1 号の刊行を持ちまして 3 年間の任期を完了しました。皆さまのご協力やご理解に感謝致します。

今期は機関誌の出版社を長年お世話になった二瓶社からリファレンスに変更し、あわせて編集事務局の業務をリファレンスに外注しました。これに伴い、機関誌編集に関わる作業を整理して、文章化し、手順や手続き、各種定型書類などを見直して、整備しました。このため当初は機関誌の刊行が遅れ、皆さまにはご迷惑、ご心配をおかけしましたが、2 年め、3 年めは刊行スケジュールを守って出版することができました。

定期刊行（毎年度 1 号は 7 月に、2 号は次の年の 2 月に必ず出ます）の成果は大きいです。以前あったような 1 年以上放置されている論文はなくなりました。投稿時に完成度の高い原稿であれば半年以内で受理し、投稿から 1 年以内に（理論的にはタイミングがあれば半年以内に）掲載できる体制が完成しました。会員の皆さま、ぜひ行動分析学研究に論文を投稿して下さい。

事務的な作業に追われた 3 年間でしたが、すべての仕事は『行動分析学の活性化』を目指してやってきました。機関誌の定期刊行や査読の迅速化は、よい研究をできるだけ早く世に出して、さらなる研究のきっかけとするために欠かせません。「投稿の手びき」や「執筆要項」の改訂、査読評価シートの見直し（論文の評価基準の見直し）、「査読者へのガイダンス」の作成などは、投稿された論文をより良いものに仕上げ、

そのプロセスを可能な限り透明で、わかりやすく、やりがいのある仕事にするために重要です。そして主に査読を担当する編集委員と定形外の判断に責任を持つ編集執行部からなる編集委員会体制を組むことは、質が高く、教育的で、ポジティブな査読システムを維持するのに必要でした。最後に、これらすべてのことを内規（案）として文章化することで、編集委員会の仕組みを改善していきやすくなりました。

内規については今年度総会での承認をお願いすることになるかと思われます。また、論文種別の見直しや、研究倫理に関する規定や書式の見直しも、森山新編集委員長体制へ引き継がれます。昨年度から開始した英文校閲支援ボランティア紹介システムの試行も継続されることが決まっています。

個人的には、この 3 年間は今後十年くらいのための基盤づくりをしたという感想を持っています。お世話になった編集委員の先生方、英文校閲のステファニー・富安先生に敬意を表し、今後のさらなる発展を森山先生に期待致します。

（島宗 理）

研究教育推進委員会

1. 研究教育助成事業

1) 自主公開講座

2009 年度 3 件（申請者：平澤紀子、武藤 崇、吉岡昌子）

2010 年度 3 件（申請者：平澤紀子、武藤

崇2件→延期実施)

2011年度 5件(申請者:平澤紀子、山本淳一、仁藤二郎、田中清章、島宗理)

2) 研究会開催助成事業

2011年度より新しく実施。研究会開催助成要領作成

(<http://www.j-aba.jp/award/assist.html>)

2011年度 2件(申請者:坂上貴之、三田村仰)

2. 学会賞

1) 実践賞

第7回(2009): NPO 法人つみきの会

第8回(2010): 受賞者なし

第9回(2011): 徳島ABA研究会

2) 論文賞(第5回)

第5回(2009~2011)対象巻数: 23巻1号~26巻1号

丹野貴行・坂上貴之(2011)行動分析学における微視-巨視論争の整理- 25巻2号, 109-126.

2012年度年次大会(高知大会)において実践賞および論文賞の授賞式&記念講演を実施する予定。

3. 他学会との連携事業

1) 学校心理士認定研修会の開催(教育セッション)

2009年度年次大会(筑波大学)

講師: 加藤哲文(上越教育大学)・小野昌彦(宮崎大学)・井上雅彦(鳥取大学)

2010年度年次大会(神戸親和女子大学):

講師: 杉山尚子(山脇女子短期大学)・山本淳一(慶應義塾大学)

2011年度年次大会(早稲田大学): 「学校における行動コンサルテーションの理論と実際」

講師: 大石幸二(立教大学)・米山直樹(関西学院大学)

2) 認定心理士資格研修会

テーマ: 社会に活かす行動分析学

講師: 杉山尚子、中島定彦、佐竹真次

日時: 平成24年01月22日(日) 13:00~

16:40

場所: フォレスト仙台(〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 TEL:022-271-9340)

3) 日本行動療法学会との連携

2010年度: 松見先生を中心に、行動療法学会との連携の打診

2011年度: 日本行動療法学会第38回年次大会(立命館大学)における共同企画の検討

4) 第4回 ACBCT(Asian Cognitive Behavior Therapy Conference)/2013年

大会長: 大野裕 日本認知療法学会理事長
開催に向けて三学会(認知療法学会、行動療法学会、行動分析学会)の連携の検討を開始。

4. 学会における企画

第27回年次大会

学会企画シンポジウム「Behavioral Human Serviceology at Twenty: What is a Heart of Behavior Analysis?」

企画: 望月・武藤

話題提供: 望月、井垣、武藤

指定討論: 井上、山岸

第28回年次大会

学会企画シンポジウム(倫理委員会)「行動分析家が人を対象とした研究ならびに臨床的活動を実践するときに必要な倫理的配慮」

企画: 森山

司会: 中島

話題提供: 中野、望月、坂上

指定討論: 武藤、渡邊

第29回年次大会(早稲田大学)

学会企画ワークショップ「はじめての行動分析学実験: Visual Basic でまなぶ実験プログラミング」

講師: 中鹿直樹(立命館大学)

学会企画シンポジウム「東日本大震災の障がい

児・者支援の状況と課題」

企画・司会：研究推進委員会（浅野俊夫・井澤信三・松見淳子）

話題提供：井上雅彦（鳥取大学）・岡村章司（兵庫教育大学）・大久保賢一（北海道教育大学）
鶴巻正子（福島大学）

コメント：長葭康紀（岩手県発達障がい者支援センター）、園山繁樹（筑波大学）

次号、行動分析学研究に報告書掲載予定

5. 研究教育を推進するための学会 Web の情報の更新

卒論・修論のデータベースの紹介を開始した。

その掲載方法についてはニュースレターで紹介。

行動分析学が学べる大学情報データベース
学会資料アーカイブ（浅野俊夫）

出版企画委員会

皆様のご協力により、日本行動分析学会編集および監修という形で、以下のような出版をすることができました。ありがとうございました。また、公刊予定の出版物も、今後ともよろしく願いいたします。

1) 公刊した出版物（「学会 30 年記念事業」の一環として公刊）

①「行動分析学研究アンソロジー 2010」（星和書店：2011 年 3 月 3 日公刊）

②「はじめての行動分析学実験—Visual Basic でまなぶ実験プログラミング」（ナカニシヤ出版：2011 年 9 月 30 日公刊）

2) 公刊予定である出版物

①翻訳“Ethics for Behavior Analysts: 2nd Expanded Edition”（二瓶社から 2012 年度公刊予定）（武藤 崇）

広報委員会

前期 3 年間は、青山謙二郎理事と野呂文行理事と 3 人体制で取り組みました。広報委員会の任務は J-ABA ニュースの季刊発行を主に、新たに国際関係を担いました。J-ABA ニュースは本学会において独特かつ貴重な位置づけにあることを再認識しました。連絡・報告的な機能はもちろんですが、それ以上に「読み物」として行動分析学に関する貴重な情報が掲載され、また学会 HP に掲載されていることから世界への発信源になっています。国際関係は ABAI 関係の活動が主となりましたが、毎年 EXPO で J-ABA の活動をポスター発表することをはじめ、様々な体験をすることができました。

以下では、3 年間の会員各位からのご協力に感謝しつつ、広報関係と国際関係に分けて主な活動内容と引き継ぎ事項をまとめてみました。

I 広報関係

1. ニュースレター（J-ABA News）の季刊発行（No.54~No.65）

- 1) おおよその発行月日（春・夏号は委員長担当、秋号は野呂委員、冬号は青山委員）
 - ・春号・・・5 月 25 日（引継ぎ直後の No.54 のみ 6 月 30 日発行と大幅に遅延した）
 - ・夏号・・・8 月 25 日
 - ・秋号・・・11 月 25 日
 - ・冬号・・・2 月 25 日

2) 新たな記事カテゴリー

- ・連載：いま、こんな社会貢献しています（2011 年春号 No.62~）
- ・連載：いま、こんな授業しています（2011 年春号 No.62~）
- ・年次大会参加体験記（基礎・応用各 1 名）（2010 年秋号 No.60~）
- ・連載：いま、こんな研究会しています（2010 年春号 No.58~）
- ・連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職（2009 年春号 No.54~）

3) 佐藤方哉先生の追悼記事 4 編を 2010 年

秋号 (No.60) に掲載

- 4) 東日本大震災の関連記事 4 編を 2011 年春号 (No.62) に掲載

2. 佐藤方哉先生の遭われた鉄道事故に関連した要望書

- ・常任理事会決定として、ホーム柵 (ホームドア、転落防止柵等) 設置促進の要望書を、平成 22 年 9 月 8 日付けで国土交通大臣ならびに京王電鉄社長宛に郵送。併せて、本件について国土交通記者会、国土交通省交通運輸記者会、学術記者会の 3 記者クラブに資料提供。学会 HP に掲載。
- ・京王鉄道広報部からは返書があり、常任理事会で確認した。

3. 学会 HP の拡充

- ・事務局において随時最新の情報を掲載した。

<引き継ぎ事項>

J-ABA ニュースについては、学会としての方向性等を随時共有できるように、常任理事会の報告や委員会からの記事をもう少し増やした方がよいかもしれません。記事カテゴリーについては再度検討され、よりよいものがありましたら整理・追加等をお願いします。

II 国際関係

1. ABAI の EXPO における J-ABA のポスター発表

毎年実施し、J-ABA ニュースの配布、特に臨席となったブラジル、台湾、中国等の発表者と交流を深めた。

2. 日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業

- ・助成を受けた学生会員 (敬称略)。J-ABA ニュースに体験記を掲載。

2009 年度・・・沼田恵太郎、松下浩之

2010 年度・・・木下奈緒子、長谷川福子

2011 年度・・・小幡知史

3. 「WCBCT2004 記念若手研究奨励基金」による WCBCT2010 (ポストン) 発表助成

- ・助成を受けた会員 (敬称略)・・・藤田昌也、木

下奈緒子、中島美鈴

- ・J-ABA ニュース No.59 (2010 年夏号) に参加報告を掲載。

4. ABAI の EXPO における米国在住日本人学生に対する日本語書籍の贈呈

日本在住会員から寄贈された書籍により毎年実施し、好評であった。

5. ABAI の HP 記事の Non-U.S.A. Chapters を毎年更新した。

6. ABAI のニューズレター Inside Behavior Analysis における J-ABA の情報を更新した。

7. 2010 年の ABAI (サンアントニオ) において、Chapter Leadership Training のセッションに参加し、ABAI からの依頼により J-ABA の発展過程についてプレゼンした。

8. 現在のところ広報委員会 (国際関係) の正規の業務とはなっていないが、ここ数年は ABAI において、杉山尚子理事のご尽力により、米国在住日本人学生と日本からの参加者による Local Beer SIG が定例化し、貴重な情報交換の場となっている (最近では参加者が 40 名位 ; 詳細は、J-ABA ニュース No.60、No.54 の掲載記事参照)。

<引き継ぎ事項>

2 年ごとに米国以外で開催される ABAI の International Conferences についても学生への助成をすることが常任理事会で決定され、今後応募要項が公表されます。

2011 年の ABAI の EXPO では台湾、中国 (Central-China) と隣になり、韓国や香港等を加え、東アジアのネットワーク構築も可能ではないかと思いました。J-ABA ニュースへの寄稿や、年次大会での招待発表などは可能かもしれないと思います。無理のない範囲でご検討いただければと思います。

2015 年には ABAI の International Conferences の日本開催が決定されており、今後サポート体制を検討する必要があります。

(園山繁樹)

倫理委員会

I. 挨拶

藤健一 前理事長のもと、私は、倫理委員を2009年4月から2011年3月までの3年間務めさせていただきました。日本行動分析学会倫理委員会の目的は、会員の諸活動の倫理的公正さを維持するための活動を行うことでもあります。その目的のため、私を含め、次の4名の先生方（敬称略）が倫理委員として活動して下さいました。中野良顯（東京成徳大学大学院特任教授、NPO 法人教育臨床研究機構 なかよしキッズステーション）、鎌倉やよい（愛知県立看護大学）、吉野俊彦（神戸親和女子大学）、大石幸二（立教大学）。

私は、委員の先生方ならびに前理事の方々、そして学会会員の皆様の御協力によって委員長を務めることができました。この場を借りてお礼を申し上げます。

以下、前委員会の活動報告と今期委員会への引き継ぎ事項を報告いたします。

II. 活動報告

私達の活動内容は、①倫理問題に関する啓発活動のための情報収集と情報提供、②他学会との連携ならびに本学会による研修会、講習会の開催、③出版事業、④倫理綱領等の見直し、の4つでした。

1. 情報提供

以下、提供した情報を列記します。

厚生労働省「動物実験等の実施に関する基本指針（案）」

文部科学省「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針（案）」

(i) 日本学術会議「科学者の行動規範について」

(ii) 日本学術会議会長談話

(iii) 文部科学省の科学技術・学術審議会内に設けられた研究活動の不正行為に関する特別委員会の報告書「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」

また、下記の情報は、学会ウェブページのブログに掲載しました。

(i) 利益相反に関する厚生労働省指針

(ii) 厚生労働省「臨床研究に関する倫理指針」改正

他、中島定彦前々倫理委員長からの情報提供「日本臨床心理士会 倫理ガイドライン（平成21年3月 日本臨床心理士会第7期倫理委員会）」

「日本基礎心理学会」作成の『基礎心理学研究者のための研究倫理ガイドブック』

<http://www.soc.nii.ac.jp/psychono/>

書籍

伊勢田哲治 『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会

鎌倉前委員からの情報提供

臨床研究の指針と施行通知（厚生労働省の研究関連の指針）

<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/kousei/i-kenkyu/index.html>

2. 研修会、講習会

研修会と講習会は、下記の学会で行われました。

(1) 2007年度 第25回年次大会研修会（立教大学）

テーマ「行動分析学と獣医学の立場からみた動物実験における倫理問題」

話題提供：動物実験を行う行動分析学の立場（森山前委員）、家畜・愛玩・展示動物の治療を行う獣医学の立場（非会員の桜井富士朗氏）、人の臨床研究に関わる看護・医療の視点（鎌倉前委員）

日本動物心理学会・日本動物行動学会・日本基礎心理学会会員にも情報提供

(2) 2007年度 日本動物心理学会第68回大会の特別講演「動物実験倫理指針の運用と課題」

（講師は財団法人実験動物中央研究所の鍵山直子氏）の内容を、本学会会員にも提供

(3) 2010年度 第28回年次大会（神戸親和女子

大学、吉野俊彦実行委員長)にて、学会企画、倫理委員会主催のシンポジウムを開催

タイトル:「行動分析家が人を対象にした研究ならびに臨床的活動を実践するときに必要な倫理的配慮」

司会:中島定彦(関西学院大学)、

企画:森山哲美(常磐大学)

話題提供:

中野良顯(東京成徳大学大学院特任教授、NPO 法人教育臨床研究機構 なかよしキッズステーション):「行動療育家養成の視点にたった倫理」

望月昭(立命館大学):『IRBとしての「人を対象とした研究倫理委員会」と立ち上げるときー行動分析学あるいは対人援助学の立場からー』

坂上貴之(慶應義塾大学):「倫理的随伴性がもたらすもの:ヒトを対象とした心理学実験の研究倫理」

指定討論

武藤崇(同志社大学)

渡邊修宏(水戸総合福祉専門学校)

(4) 行動療法学会の年次大会(2012年9月21日~23日)で、本学会との共同企画として倫理に関するシンポジウムが開催されることになった。

3. 倫理に関する書籍出版事業

(1) 出版企画委員会で予定していた「研究法としての研究倫理:研究行動を促進する倫理」の出版事業との関連について検討しました。

(2) 倫理に関する本(J. S. Bailey & M. R. Burch (2005). *Ethics for Behavior Analysis*. LEA)の翻訳

この翻訳事業は、日本行動分析学会創立30周年記念事業の一つとすることになりました。当初、初版の翻訳に取り組んでおりましたが、第2版が2011年3月15日に出版されたため、初版の翻訳を中止して第2版を翻訳することになり

ました。翻訳執筆者は、前倫理委員の5名で、現体制でも変更せず、この5名が担当することになりました。著者Bailey教授の許可も得て、出版は二瓶社が対応することになりました。

4. 倫理綱領等の見直し

倫理委員会と編集委員、年次大会企画委員会のそれぞれから『行動分析学研究』への投稿論文の研究倫理に関して見直しが求められました。

(1) 倫理委員会からの提案

倫理委員会からは、行動倫理の広報活動として、投稿規定に倫理綱領を明記すること、『行動分析学研究』投稿論文の執筆事項に、「倫理的配慮または倫理的手続き」の項を追加することが提案され、前編集委員会(島宗理 前委員長)に検討を求めました。その結果、投稿規定への倫理綱領明記は、規定の分量から難しいとの回答を得て、棄却しました。かわりに、倫理綱領の運用細則に、下記の文を明記することになりました。

『行動分析学研究』に投稿する者は、編集委員会が定めるところの研究倫理審査過程に従って、倫理的配慮がなされた研究であることを証明する文書を投稿論文と併せて提出することが必要である。」

投稿論文に倫理的配慮の項を設けることについて、倫理委員会は、編集委員会から具体的な例を求められたままとされており、この問題は、現倫理委員会への引き継ぎ検討事項になりました。

(2) 編集委員会からの提案

編集委員会から倫理委員会に、『行動分析学研究』投稿論文の倫理的配慮を確認する方法の検討が諮問されました。その結果、倫理委員会は、研究倫理の誓約書のモデルを2つ作成しました。1つは、倫理的配慮がなされた研究であることを証明する文書として、すでに研究を終えた者による誓約書(「倫理をこのように守りました」という意味での誓約書)のモデルであり、これは、著作権確認書と併せて編集委員会によつ

て第25巻第2号より導入されることになりました。もう1つは、これから研究する者による誓約書のモデルです。

編集委員会からは、投稿者が倫理のチェックを受けるための具体的な方法、そして、投稿論文の査読の過程で倫理上問題が生じた場合の対応方法についての検討が求められました。その結果、倫理委員会は、下記の事項を決定し、前常任理事会で承認されました。

投稿論文研究の倫理的配慮に対するチェックを下記の方法で行う。

① 編集委員会は、投稿者が研究参加者の同意を得たのかどうかを確認する（同意書を提出してもらおう）。

② 関係機関（倫理規定を持つ委員会がある機関）の審査を受けたのかどうかを確認する。

③ 本学会倫理審査会（下記、注を参照）へ直接、倫理審査が申請された場合、下記の④の(c)以降の手続きを経て、倫理審査を実施する。この場合、投稿者は、編集委員会に審査を依頼する。

④ 個別具体的な倫理上の問題が生じて、査読が困難な場合、下記のとおりとする。

(a) 査読者は、研究方法に倫理上の問題があると判断したとき、倫理審査会設置を要請する。この場合、査読者は、投稿者と編集委員会委員長の両方に投稿論文の倫理的審査の必要性を報告する。

(b) 編集委員会委員長は、投稿者に本学会倫理審査会の審査を受ける意向があるかないかを尋ねる。

(c) 投稿者が審査を希望したとき、編集委員会委員長は、倫理審査会の発足と倫理審査会による投稿論文の倫理審査を倫理委員会委員長に依頼する。

(d) 倫理委員会委員長は、投稿論文の研究領域に詳しい専門家（学会員）3名を指名して、その3名からなる倫理審査会を臨時に設置する。

(e) 指名を受けた3名からなる倫理審査会は、審査依頼を受けて、審査会代表者を決定した上で審査する。

(f) 審査会の多数決をもって結果を決定する。審査会代表者は、審査結果を倫理委員会委員長に報告する。

(g) 倫理委員会委員長は、その結果を編集委員会委員長に伝える。

(h) 編集委員会委員長は、倫理審査会の結果を投稿者に伝える。

注:倫理審査会は、常設機関ではなく、審査が必要になったときに設置される。

(3) 年次大会企画委員会から

年次大会で発表される研究内容の倫理チェックは、大会準備委員会に委託することになりました。2011年度年次大会の第1号通信では、以下の文章を記しました。

「(6) 本学会の目的に照らして不適切だと思われる研究、倫理面の配慮に欠けるとされる研究については、発表をお断りすることがあります。」

なおチェックは、最初の発表申し込みのときだけでなく、要旨提出のときにも準備委員会が実施することになりました。準備委員会で判断が難しいケースは、年次大会企画委員会に判断を要請し、理事長と事務局長の了解のもと年次大会企画委員会の責任で回答することになりました。

Ⅲ. 今期委員会への引き継ぎ検討事項

今期委員会への引き継ぎ検討事項は、以下のとおりです。

(1) 翻訳出版作業の継続

(2) 倫理審査に関する規定づくり

① 倫理審査チェック過程を規定として改め、それを投稿規定ないし倫理規定に明記する。

② 年次大会発表研究の倫理チェックについて下記の2点を検討する。

(a) 行動分析学の標準的な研究を例示する必要がある。

(b) 発表不採択とされたときの異議申し立てができるという一文を付記する必要がある。

(3) 被験体が動物の場合の倫理的配慮について

の検討

- (4) 倫理に関する情報提供法についての検討
- (5) 投稿論文の様式に、「倫理的手続き」の項を設けることについての審議
- (6) シンポジウムやワークショップ、講演会の開催についての検討
- (7) 出版企画委員会で予定していた「研究法としての研究倫理：研究行動を促進する倫理」の出版事業との関連についての再検討

以上です、長い報告となって申し訳ございません。行動分析学の研究がさらに発展していくためにも倫理的事項の検討は必要です。倫理による制約が、私達の研究行動に制限を加えるものではなく、研究行動を促すプロンプトになることを期待して、前倫理委員会の報告を終わります。ありがとうございました。(森山哲美)

年次大会企画委員会

藤健一前理事長によって 2009 年に設けられた年次大会企画委員会の委員長として、委員の杉山尚子理事、井上雅彦理事とともに、年次大会関連業務を 3 年間担当させていただきました。この委員会は学会誌編集委員会や倫理委員会などと異なり、会則等で規定された常置委員会ではなく、理事長判断で設置された有期の委員会です。委員会内規等も存在しません。この委員会の発足時に藤前理事長より与えられた課題は 3 つありました。以下、その課題順に 3 年間の成果をご報告いたします。

1. 年次大会開催方式の研究と提案

学会の大規模化に伴い、年次大会の会場を引き受けていただくことが可能な大学や地域が限られてしまうことが懸念されていました。そこで、(1)小規模な大学や大学以外での開催、(2)地方都市での開催、を基本方針としました(もちろん、これは大都市・大規模校での開催を妨げるものではありません)。この方針の下、年次大会準備委員長候補として常任理事会などで

名前の挙がった方へ積極的に働きかけると同時に、それを可能にするための方策改善を進めました。その結果、神戸親和女子大学(2010年、委員長:吉野俊彦先生)、高知城ホール(2012年、委員長:山崎裕司先生)での開催が実現しました。なお、次年度と次々年度についても地方都市での開催が内定しています。

また会員の皆さんや会場校、常任理事会・理事会から提出された課題を研究し、以下の3点を新たに実施しました。(1)会員でなくても発表できる制度(ただし、正会員が責任発表者となります)を2010年度大会から導入しました。(2)行動分析的ではない発表、非倫理的な発表について2011年度大会から、不適切な発表は認めないことにしました。(3)年次大会における会員自主企画の増加に対応するため、数の制限、無料公開化の制限、非会員発表者の大会参加費支払い義務化の方針を確認しました。

2. 年次大会開催にかかわる各種業務の支援

会員全員に送付される大会1号通信、プログラム・発表論文集の発送業務について、外注化の方策を模索しました。発送業務の軽便化により会場校の負担を減らし、スタッフの少ない組織でも大会準備運営を可能にするを目指したためです。その結果、2010年度と2012年度の大会では、一部業務を業者委託することになりました。また、学会事務局と連絡を取りながら、会場校に各種の助言を行いました。例えば、次回大会会場校への前回大会会場校(必要に応じて前々回大会の会場校)からの資料引継ぎや情報提供の仲介を行いました。

3. 年次大会における各種学会企画の実施

この課題については研究教育推進委員会との業務重複があり、また、会員自主企画の多さもあって、年次大会企画委員会として独自の企画を行うことはなく、連絡調整役を務めるにとどまりました。

園山繁樹新理事長によって、年次大会企画委員会は年次大会支援委員会と名を変え、存続す

ることになりました。引き続き私が委員長となり、奥田健次常任理事と井澤信三理事に委員としてお力添えいただくことになりました。本学会では大会の主催者は学会となっております（したがって、「主催校」ではなく「会場校」あるいは「大会校」と呼びます）が、実際の大会業務は準備委員長をはじめとする会場校の皆さんのご尽力によるものです。したがって、本委員会はプロデューサー・ディレクターではなく、サポーターとして会場校の活動を支えさせていただくこととなります。

学会の大規模化に伴い、現在2日間で行って

いる大会の会期延長も議論されています。その場合に会場を引き受けていただくことが可能な大学や地域が限られてしまうことがないように、大会運営の方法をさらに改善する必要があります。また、2013年度は学会設立30周年記念企画があり、大会との調整が必要となります。課題山積ですが、会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。（中島定彦）

<連載再開 jABAシアター>

アリス・イン・ワンダーランド ～「オズの魔法使い」再見～

伊藤 正人（大阪市立大学）

私は、ニューズレターの1996年冬号から1998年秋号まで約3年間にわたって、「jABAシアター：行動分析的視点から映画を見ると」と題し、名作映画に描かれた心理学の問題を取り上げ、紹介してきました。幸い会員の皆様には好評だったようで、学会などでお会いした折には、多くの皆さんからコメントや感想をいただき、望外の喜びでもありました。今回、14年ぶりに（時間のたつのは早いものです）映画を取り上げますが、今回は、少し広い視点から見てみたいと思います。

「ウサギの穴に落ちてから、私は指図されてばかり。縮んで伸びて引っかかれ、ポットの中へ、でも人違いも何もかも私の夢よ。これからは私が決める。運命は私が開くわ！」とアリスは、囚われの身となった帽子屋を助

ける決意をする。

最初に取り上げる映画は、2010年に公開された、ティム・バートン監督、ジョニー・デップ主演の「アリス・イン・ワンダーランド」である。この映画は、ルイス・キャロルの小説「不思議の国のアリス」と「鏡の国のアリス」を翻案したもので、成人した主人公のアリスが服を着た白ウサギを追いかけて、以前と同じように、ウサギの穴に落ちるところから物語は始まる。

1997年春号で取り上げた「オズの魔法使い」（1939年制作）では、「頭脳」、「心」、「勇気」という心的用語が、それぞれ「卒業証書」、「功労記念品」、「武勇勲章」という、いずれも条件強化子として描かれており、心理学の観点から興味深い映画であることを指摘したが、

この映画は、映画史上でも、後に作られた映画に様々な影響を与えてきた記念碑的作品である。映画は、一般に、制作された時代の価値観を何らかの形で反映しているといわれるが、この映画も1930年代の米国社会の価値観（家庭や家族が大切）を色濃く反映したものと見える。このことは、映画の中で、繰り返して出てくる「お家ほど良いところはない」や「心から求めるものを探すなら・・・、きっと家の近くにあるんだわ。家になればどこにもないの」という、主人公ドロシーの台詞に象徴的に表されている。今回取り上げる映画「アリス・イン・ワンダーランド」は、映画制作の上で「オズの魔法使い」と多くの重なる部分を持っているが、「オズの魔法使い」に見られる価値観とは対照的であり、2010年代の価値観を表すものとして興味深いものがある。このため、副題に、「「オズの魔法使い」再見」とした。

お年頃となったアリスは、母親に連れられて、貴族との婚約のために設けられたパーティ会場へ出かけて行く。大勢のパーティ参加者の前で、平凡な貴族から求愛を受けるが、求愛を受け入れかねていると、そこに、懐中時計を持ち、服を着た白ウサギが現れる。その場から逃れるように、白ウサギを追いかけると、穴に落ちてワンダーランド（アンダーランド）へ迷い込んでしまう。穴から落ちた先は、小さい頃に見た夢と同じような部屋で、そこには、食べると体が伸縮するチーズや飲み物が指示書きとともに置かれていた。縮んだり伸びたりしながら、ようやくの思いで、部屋の外に出てみると、そこはアンダーランドという不思議な国であった。

「オズの魔法使い」のドロシーが夢の国へのドアを開け、目前に広がる別世界（ここからカラー映像になる）に驚嘆して言う、有名な台詞「トートー（犬の名前）、ここはカンザスじゃないみたいよ」に対し、アリスもドアを開けて外の世界を目の当たりにして「ここ

はヘンテコなところ」という。そこでは、チェシャ猫、青色の芋虫、ドードー鳥、三日月ウサギ、そしておかしな帽子屋（以上は「不思議の国のアリス」に登場）、丸々と太った双子のトウイードルダムとトウイードルヅイー（「鏡の国のアリス」に登場）などがアリスの到着を待ちわびていた。彼らは、アンダーランドを支配する独裁者の赤の女王（「オズの魔法使い」では、醜い悪い魔女）を倒す救世主としてアリスを待望していた。というのも、アンダーランドの預言書には、“来るべき「フラブジャスの日」に、金髪の戦士（アリスそっくりな姿）がヴォーパルの剣を使って、怪物ジャバウオッキーを倒す”と書かれていたからである。しかし、彼らの間では、目の前に現れた今のアリスが本当のアリスかどうかを巡って意見が分れてしまう。賢者の青い芋虫には、「ほとんど違う！」と断定され、皆から「違うアリス」ではないかといわれて、責め立てられるが、唯一、おかしな帽子屋だけは、「本当のアリス」であることを確信していた。そんなとき、赤の女王が放ったバンダースナッチ（犬のような怪物）やジャブジャブ鳥が皆を襲い、この混乱のさなかに赤の女王の騎士（赤の騎士）が皆を連れ去ってしまう。預言書を手に入れた赤の女王は、そこに書かれた内容に激怒し、アリスを生け捕りにするように命令する。

追っ手から逃れたアリスが、チェシャ猫に導かれて三日月ウサギの家へ行くと、そこでは、おかしな帽子屋がアリスの到着を何年も待ちわびながらお茶会（ティーパーティ）を続けていた。帽子屋は、アリスを一目見るなり「君だね、僕には一目でわかる」と歓迎してくれるのであった。しかし、話をする間もなく、追っ手が迫ってきたため、帽子屋は、アリスに縮み薬を飲ませ、ティーポットのなかに隠して追っ手をかかわす。白の女王（「オズの魔法使い」の美しい北の魔女グリンダと重なる。仕草もそっくり）の城へと急ぐ途中に、

再び追っ手が迫ると、小さくなったアリスを帽子につかまらせ、遠くへ投げて逃がすが、自らはアリスを守るために、進んで囚われの身になってしまう。

帽子の中で、一夜を過ごしたアリスは、帽子屋を救うために、赤の女王の宮殿へと向かうが、小さいままでは帽子屋を救えない。そこで再び伸び薬を飲むと、今度は大きくなりすぎてしまう。アリスは機転を利かせて、アリスと別人になりすまして、宮殿に潜り込むことに成功する。宮殿では、赤の女王の暴君ぶりの数々が描かれるが、例えば、自分が食べようと置いておいたグランベリータルトをつまみ食った召使いのカエルを見つけると、「首をはねよ！」と命令するのである。「不思議の国のアリス」では、むやみやたらに「首をはねよ」と叫ぶハートの女王が登場する。ミード (Mead, G. H.) は、「社会行動主義者の観点からの精神、自我、社会」のなかで、この部分を引用して、“意識について何が行われたのか？ワトソンの態度は、「不思議な国のアリス」の女王の態度であった—「彼らの頭を切っておしまい！」—そこでこのような事柄はなくなった”と述べ、ワトソンの意識に対する態度を明快に示している。

アリスが探し出したヴォーバルの剣を白の女王に献上すると、白の女王は、銀色の甲冑をつけた像の手に剣をおさめ、「あと必要なのは、戦士だけよ」といって、アリスを見つめる。この間、死刑宣告をされた帽子屋とヤマネは、チェシャ猫の助けで、宮殿を脱出することに成功する。そして、運命の日「ラブジャスの日」がいよいよ近づく。迷っているアリスを見て、羽化の準備に入った青い芋虫は、諭すように、戦い方を教え、「さらばだ。アリス。生まれ変わったらまた会おう」といってアリスを激励する。いよいよ出陣となり、アリスは意を決し、銀の甲冑を身にまとい、手にはヴォーバルの剣を持ち、アンダーランドを支配する邪悪な赤の女王と怪物ジャバウ

オッキーに立ち向かうのである。

死闘の末、怪物ジャバウオッキーを倒したアリスが「家に帰れるの？」と白の女王に聞くと、女王は「あなたが望むなら」といって、怪物ジャバウオッキーの血の入った小瓶（帰還薬）を渡す。帽子屋が「残れよ」と引き留めるのを「返事をしなくてはいけないし、やるべきことがあるの」と別れを告げる（「オズの魔法使い」のドロシーと仲間たちとの最後の別れの場面を彷彿とさせる）。

パーティ会場に戻ったアリスは、待ちくたびれた相手に結婚を断り、母や姉に「自分の人生は自分で決めるわ」と決意を告げる。亡き父親の貿易会社を買い取った見合い相手の父親に、亡き父親譲りの先見の明を認められ、見習社員として働くことになる。そして、家族に見送られ、旅立つ船上で、遠くの水平線を見つめるアリスの肩には羽化した青い蝶が止まり、実業家としてのアリスの前途を祝福するのであった。

このように、映画「アリス・イン・ワンダーランド」は、「女性の自立」という現代的価値観を示したものと見える。映画の舞台は、19世紀の英国であるが、この時代の女性たちの置かれた立場は、親の決めた「幸せな」結婚を受け入れ、子を産み、育てること（貴族の家であれば、さらに跡継ぎである男の子を生むこと）という家や夫に従属的なものであった。こうした時代背景は、公爵夫人となった女性を描いた映画「ある公爵夫人の生涯」（故ダイアナ妃のご先祖を描いた作品）の中にも示されている。このような時代背景を描くことで、アリスの自立（実業家への第1歩）をより鮮やかなものに行っているのである。

「オズの魔法使い」から「アリス・イン・ワンダーランド」に見られる米国社会の価値観の変化は、劇的といえるが、実は、この二つの映画をつなぐものとして、「オズの魔法使い」から約50年後に制作された、もう一つの「オズの魔法使い」といわれる、デビット・

リンチ監督の映画「ワイルド・アット・ハート」(1990年制作)がある。ここでは、すでに家庭や家族が崩壊していることが描かれ、米国社会の価値観がもはや家庭や家族にはな

いことが明らかにされている。女性の自立は、皮肉にも家庭や家族の崩壊がもたらしたものとえよう。

編集後記

本年度4月より広報委員長として3年間、J-ABAニューズの編集に携わることになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。この度何とか新委員会による第1号が完成いたしました。「2012年春号」ですが、まもなく立秋です。実際に編集してみると、思いのほか仕事量が多く、諸先輩方のこれまでの苦労を今になってやっと実感いたしました。昨年度までの3年間の編集方針を踏襲し、これからの3年間も、私を含め4名の広報委員(米山直樹、佐伯大輔、是村由佳、大河内浩人)が交代で編集を担当いたします。担当者によってそれぞれの特色が出

せればと考えています。その先駆けとして、今号では、伊藤先生にj-ABAシアターの執筆をお願いいたしました。振り返れば、私が一会員として、最も熱心にJ-ABAニューズを貪り読んでいたのは、島宗先生が編集なさっていたころで、「人気」シリーズであったj-ABAシアターの印象は今でも強烈に残っています。当時のような面白いニューズレターを作ることは無理かもしれませんが、会員の皆様に少しでも楽しんでいただけるものになるよう、いろいろと挑戦していきたいと思っております。

(HO)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582 大阪府柏原市旭が丘4-698-1
大阪教育大学 大河内研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
大河内浩人
E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp